「英語コミュニケーションⅠ」単元ごとの指導と評価の計画

愛知県立美和高等学校
教 諭　中村　卓真

１　日時・実施場所

〈省略〉

２　学　　級

〈省略〉

３　学 級 観

〈省略〉

４　教　　材

〈省略〉

５　単元の目標

ＡＩの普及が進む現代社会において、ＡＩのできること、できないことを明確に理解し、身近なところでどのようにＡＩが使われているかについて情報の収集・整理・分析及び発表をすることができる。また、今後のＡＩと人間の役割について、自分の意見を論理的に説明することができる。さらに、発表の場において他者からの質問に対して即興で応答することができる。

６　関係する領域別目標（学年のＣＡＮ－ＤＯ）

聞くこと	家庭や学校における身近な話題についての情報や説明を聞き取ったり、相手からの指示を理解したりすることができる。
読むこと	家庭や学校における身近な話題についての情報や説明を読み取ったり、相手からの指示を理解したりすることができる。
話すこと［発表］	日常的な話題や、社会的な話題について、自分の意見を明確に述べ、論理的な理由や具体例を交えながら、30 語程度で発表できる。 １　ＳＶを明確にして、理由を述べる。 ２　アイコンタクトを重視する。 （３　質問に即興で応答する。）
書くこと	家庭や学校生活などの日常生活で聞いたり読んだりしたこと、学んだことや体験したことの概要や要点、その話題に関する意見やその理由を 50 語程度で書くことができる。

７　単元の評価規準（五つの領域ごとの評価規準の設定）

評価の観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
読むこと	・文章を読み取るために必要な語彙や名詞を修飾する分詞について正しく理解している。 ・知識を生かして文章を読み取るための語彙や文法の技能を身に付けている。	自分の考えを発表するために、ＡＩに関する説明文を読んで、概要や要点、詳細を整理している。	
話すこと［発表+やりとり］	・自分の考えを述べるために必要な要約表現や言い換え表現等を理解している。 ・自分の考えを述べるために必要な要約表現や言い換え表現等を使用して、応答ができる技能を身に付けている。	・聞き手に自分の考えをよく理解してもらえるように、ＡＩについて聞いたり読んだりしたことを活用しながら、自分が調べたＡＩの使用例やその役割について論理的な理由とともに口頭で発表している。 ・自身の発表に対する質問に即興で応答している。	・ＡＩについて聞いたり読んだりしたことを活用しながら、自分が調べたＡＩの使用例やその役割について論理的な理由とともに口頭で発表しようとしている。またその情報量においてもモデル文よりも多く、自作の表現を使用している。 ・スムーズに発表ができるように準備をしている。
書くこと	・情報や考えを書いて伝えるために必要な語彙や表現等を理解している。 ・ＡＩについての情報や考えを理由とともに書いて伝える技能を身に付けている。	読み手に自分の考えをよく理解してもらえるように、ＡＩについて聞いたり読んだりしたことを活用しながら、自分が調べたＡＩの使用例や役割について理由とともに書いて伝えている。	

８　パフォーマンステスト

〇領域

話すこと［発表＋やりとり］

〇内容

ＡＩの普及状況を調べ、その役割を発表する。またＡＩの社会進出に伴い、これからの人間の役割について実例を用いて論理的に発表することができる。

また、その発表に関する質問を受け、関連語句の同意語や平易な言い換え表現を活用して応答できる。

〇「思考・判断・表現」についての三つの条件

条件１：ＡＩの使用例について、その役割・仕事とともに述べている。

条件２：ＡＩの社会進出に伴い、これからの人間の役割を理由とともに述べている。 条件３：質問に対し、言い換え表現等を使い対応している。

○採点の基準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	・語彙や表現を適切に使用している。 ・質疑応答に同意語や言い変え表現等を正しく使用している。	・三つの条件を満たした上で、関連した情報や自分の考えを理由や具体例とともに詳しく話して伝えている。 ・質疑応答に対し、正しく対応できている。	・三つの条件を満たした上で、関連した情報や自分の考えを理由や具体例とともに詳しく伝えようとしている。 ・モデル文の量を超えている。 ・発表時間が基準以内である。(WPM131-160)
b	・多少の誤りはあるが、理解に支障のない程度に語彙や表現を使用している。 ・質疑応答に同意語や言い変え表現等を使用している。	・三つの条件を満たした上で、話して伝えている。 ・質疑応答に対し、部分的な間違いはあるものの概ね対応できている。	・三つの条件を満たした上で、関連した情報や自分の考えを伝えようとしている。 ・モデル文の量と同等である。 ・発表時間が基準以内である。(WPM100-130)
c	「ｂ」を満たしていない。	「ｂ」を満たしていない。	「ｂ」を満たしていない。

「十分満足できる」状況と判断されるもの：ａ

「おおむね満足できる」状況と判断されるもの：ｂ

「努力を要する」状況と判断されるもの：ｃ

９　単元の指導計画　　※網掛けは記録に残す評価の場面。

(聞…聞くこと、読…読むこと、や…話すこと［やり取り］、発…話すこと［発表］、書…書くこと)

時間	ねらい（■）、言語活動（丸数字）	内容のまとまり					生徒の活動状況を見届ける観点（【　】）・方法（○）
		聞	読	や	発	書	
1	■単元の目標を理解する。 ■単元内容の背景となる知識を活性化する。 ①ＡＩに関するブレインストーミングを行う。 ②ＡＩについて知っていることを、クラス全体で共有する。 ③教科書の質問に答え、続いて本文を読む。 ④単元の目標（グループワークで話し合う内容を基に、ＡＩの使用例や役割、それに対する人間の役割について、自分の考えを発表すること）を確認する。	○ ○	○		○ ○	○	【知】適切な語句・表現を使用しているか。 【思】概要や要点を適切に捉えているか。 【態】積極的に自分の意見を伝えようとしているか。 ○ワークシート ○活動の観察

2 3 4	■パート１から３の内容を口頭で要約し、それに対する感想や意見を伝える。 ①教科書の説明文を読み、ＡＩに関する使用例やその役割をメモにまとめる。 ②読み取った内容に関する感想や自分の考えを、①のメモを用い発表用に作成する。 ③発表用原稿を用い、グループ内で各パート５分から 10 分程度で音読練習する。		○ ○		○	○ ○	【知】論理構成上必要な語彙・表現を適切に使用しているか。 【思】論理性に注意して相手に伝えているか。 【態】音読のスピードが毎時上がっているか。 ○メモの内容 ○活動の観察
5 6	■ＡＬＴによる模範となるプレゼンテーションを聞く。 ①モデル文を用い、論理的な表現方法や例証の出し方を参考にする。 ■パフォーマンステストに向けたプレゼンテーション（プレパフォーマンステスト）を行う。 ②各グループ（４名程度）で発表＋20 分インターバル（パフォーマンスの調整）＋発表（２回目）の流れで活動する。 ・グループ内で発表者に対し質問を行う。 ・タイムキーパーが発表時間を計測する。 ③音読のスピードやアイコンタクトの状況、内容の伝わりやすさをグループ内でお互いに評価し合う。	○ ○	 ○	 ○	 ○		【知】適切な語句・表現を使用しているか。 【思】概要や要点を適切に捉えているか。 【態】積極的に自分の意見を伝えようとしているか。 【主】自作の表現があるか、音読のスピード、アイコンタクトの状況はどうか。 ○グループ内評価シート ○活動の観察
7	パフォーマンステスト			知思	知思主		※採点の基準等は「８　パフォーマンステスト」を参照。
後日	定期考査		知思			知思	

実践報告

１　はじめに

生徒もその存在を身近に感じている「ＡＩ」をテーマとした単元を通じて授業実践を行った。テーマが身近であれば、生徒の主体性が高めやすくなると考えた。また、パフォーマンステストをプレゼンテーションと質疑応答という形式にすることで、生徒が就職した後に求められる社会人としてのコミュニケーション能力の育成にもつながるのではないかと考えた。

２　「学びに向かう力」の育成について

生徒の「学びに向かう力」を育成するために、以下の４つの点を工夫して授業に取り入れた。

(1) 単元目標

当該単元を学習することで何ができるようになるのか、そしてそれが実社会でどのように役に立つのかについて、生徒が事前に理解することを大切にした。授業者からの口頭による説明に加え、グループディスカッションを通じて社会人としての必要なスキルを考える活動を設定した。授業者からの一方的な説明や指示ではなく、生徒自身が問いに対する答えを見つけようとすることにより、「学びに向かう力」を高められると考えた。

本実践では、“What do you think the most important skill is when you work?”という問いに対し、グループディスカッションを通して生徒が答えを見つける活動を行った。その結果、解答の一つに挙がった「プレゼンテーション能力」というワードを例に出し、この単元ではこれこそが目標であると伝えた。

(2) 単元内容の事前把握

単元内容は身近であるほど生徒は親近感を感じる傾向にある。今回は「ＡＩ」という言葉から何を連想するのかをクラス全体でブレインストーミングを行うことで意見の共有を図った。これにより、生徒間の予備知識の差を埋めることができたと考える。また、自分の意見が黒板に書かれ可視化されることで生徒の自己有用感を向上させることにもつながった。

(3) 目標の明確化

本単元に伴うパフォーマンステストとその評価基準を事前に生徒へ提示することで、生徒が目標と現状との距離を把握することができるよう工夫した。また目標を明示することで、そこに至るまでの授業で実施するタスクも先を見通して行うことができた。生徒は毎回の授業で作成する発表用原稿を毎授業後に提出し、授業者が助言を書いた。その際、抽象的な言葉は使用せず、目標と現時点での差と、目標に近づくための方策を具体例として明示した。例えば、「根拠をより具体的に出してみよう。それにはどのような方法があるか」といった助言を残すことで、生徒が自らの課題を具体化できると考えた。

(4) プレゼンテーション用原稿の音読

今回のパフォーマンステストでは話すことのスピードも評価の対象とした。音読練習を繰り返し行い、タイマーを用いて常にパフォーマンスの成果を可視化することで、現状とゴールの差に客観性をもたせることができた。

３　成果と課題

今回の実践を通じて三つのことを確認した。

(1) 事前準備の大切さ

今回の実践では生徒にとって身近に感じる話題を扱う単元を選ぶことができたが、常にそのような単元があるわけではない。いかなる単元内容であっても、生徒の興味、関心を引き出すことのできる事前準備が必要であると感じた。

(2) きめ細かい机間指導や添削指導

生徒の主体性の向上や課題解決能力のきっかけとして、きめ細かい机間指導や添削指導が効果的だと分かった。これには多くの労力が必要となるため、今後はティーム・ティーチングなどを活用して、持続可能な形で続けていける方法を考えたい。

(3) ＩＣＴの活用

今回の実践ではＩＣＴはほとんど活用しなかったが、例えば導入部分で「ＡＩ」やプレゼンテーションに関するスライドショーを導入することや、発表用原稿をオンライン化することで、生徒の学びの質を高められたり、教員の負担を軽減させたりすることができるのではないかと考えた。

４　参考文献

・*BIG DIPPER English Communication I.* 数研出版. 2021